

## 『宇治拾遺物語』における女性の描かれ方

趙 智 英

はじめに

第一章 『宇治拾遺物語』の女性が登場する説話

『宇治拾遺物語』（以下、『宇治拾遺』）には、総一九七話の長短編説話が収められている。その説話の大半が、主に男性が中心となり展開される。一方で、女性が登場する説話が少なからず存在するのも確かである。説話の中の女性は、特に下級下層の場合、無名人<sup>①</sup>が多く、『宇治拾遺』の中の女性も同様で、脚光を浴びる機会は少ない。

本稿では、そのような彼女たちが『宇治拾遺』の中でどのように描かれているか検討する。そこに『宇治拾遺』における女性理解の端緒を求めることにしたい。

なお、本稿で引用する『宇治拾遺』の本文は最善本とされる陽明文庫本を底本に採用している『新日本古典文学大系』<sup>②</sup>に依る。

『宇治拾遺物語』における女性の描かれ方

『宇治拾遺』の女性に関する先学の研究には、平城隆雄氏、畠山千春氏、出口佳奈氏などの論考<sup>③</sup>があるが、改めて『宇治拾遺』収載話を対象に、女、妻、母、娘の意味をもつ語彙を調査し、母や娘、女房、妻などあらゆる女性がどのように描かれているかを私なりに検討したい。

検討を行うにあたって、まずは『宇治拾遺』全巻全話を通して女、妻、母、娘の意味をもつ用例を確認する<sup>④</sup>。

以下は便宜上、説話番号は巻毎の説話番号ではなく、『新日本古典文学大系』に記された一話から一九七話までの通し番号で表す。

## 一・女・女房

「女」用例には、「女共（をんなども）」、「老女」、「玉女（第九一話）」、「くさり女（第九三話）」も含め、(1)第四話、(2)第八話、(3)第九話、(4)第一四話、(5)第二七話、(6)第二九話、(7)第三〇話、(8)第三三話、(9)第三四話、(10)第四三話、(11)第四八話、(12)第五〇話、(13)第五一話、(14)第五三話、(15)第五七話、(16)第五九話、(17)第六〇話、(18)第八三話、(19)第九一話、(20)第九三話、(21)第九六話、(22)第九七話、(23)第一〇二話、(24)第一〇六話、(25)第一〇八話、(26)第一〇九話、(27)第一一〇話、(28)第一一九話、(29)第一二三話、(30)第一三三話、(31)第一六〇話、(32)第一六一話、(33)第一六五話、(34)第一六六話、(35)第一六八話、(36)第一七四話、(37)第一八一話、(38)第一八六話、(39)第一九二話の計三九話の説話に見ることができるといえる。

「女房」の用例が見える説話は、(1)第九話、(2)第一四話、(3)第二七話、(4)第二九話、(5)第三四話、(6)第四八話、(7)第五〇話、(8)第六〇話、(9)第七六話、(10)第九一話、(11)第九六話、(12)第一一二話、(13)第一一九話、(14)第一二四話、(15)第一四三話、(16)第一八五話、(17)第一九二話の計一七話であり、五話以外は「女」の用例が見える説話と重複する。

出口佳奈氏は、説話集の女性たちを語彙で捉え、時代による変化と作品毎の個性に焦点を当て、論考で『宇治拾遺』において「妻」

や「親」などに比べて「女」語の登場頻度が全体の過半数を占めていることから、『宇治拾遺』が「基本的には、あらゆる女がただの「女」に集約されてしまう」と指摘しておられる。しかし、語は「女」になっていても、説話本文の文脈や状況、描写から各々の個性を見出すことができるのではないだろうか。

第三四話「藤大納言忠家物言女、放屁事」、第一〇八話「越前敦賀女観音助給事」、第一三三話「清水寺御帳給ル女事」は表題に「女」語が含まれている。第三四話の「びゞしき色好みなりける女房」は、どちらかという脇役のような登場の仕方だが、三話とも表題の「女」が説話の展開においては欠かせない主要人物となる。

第五七話「石橋下蛇事」は『宇治拾遺』の中で唯一、男性が登場しない説話である。「蛇」以外の登場人物は全て女性である。本説話は「何かに執着して蛇の身を受けて苦しみ、縁あって救われて天に生まれるといった話はよく見られる。(中略)『宇治拾遺』のこの話はそのような類型によりながら、巧みに作り上げた物語である。主人公の宮仕えする女性よりもむしろこのほうが主人公とも見える傍観者の位置の女性、この人の動きが実によく書いている」と評価される。第五七話は、雲林院の菩提講に参詣した女が決定的な謎解きの鍵を持っており、女が軸となって物語が展開される説話となる。<sup>⑦</sup>

「女人」は、(1)第九三話、(2)第一七四話、(3)第一七五話の三話に見え、「女子」<sup>をんな</sup>は、(1)第五六話、(2)第一〇八話、(3)第一一九話、(4)第一六七話の計四話に登場する。

第五六話、第一一九話、第一六七話では、土佐国幡多の郡に住む人の娘(第五六話)、生贄に指名される娘(第一一九話)、亡くなって羊の身体になった娘(第一六七話)を指す。第一〇八話は「この男女、たがひに七八十に成まで栄へて、男子、女子、産みなどして、死の別にぞ別れにける」と話末に「女子」の用例が見える。老女が中心人物として登場する説話は、第三〇話と第四八話の二話のみである。この二話について、詳細は後述する。

## 二. 妻

次に、「妻」の用例が登場する説話数を確認する。

「妻」の用例は、(1)第二話、(2)第三話、(3)第四話、(4)第五話、(5)第二九話、(6)第四一話、(7)第四五話、(8)第四七話、(9)第五七話、(10)第五九話、(11)第七七話、(12)第八三話、(13)第八五話、(14)第八六話、(15)第九一話、(16)第九六話、(17)第一〇六話、(18)第一〇八話、(19)第一〇九話、(20)第一一二話、(21)第一六八話、(22)第一七八話、(23)第一八六話、(24)第一八九話、(25)第一九四話の、計二五話の説話に見える。

右に挙げた説話の中で、第四話「伴大納言事」は次章で詳述する

『宇治拾遺物語』における女性の描かれ方

が、妻の失言によって、夫が失脚する説話で、貞観八年(八六六年)に起こった応天門放火事件とも関係すると読まれている。

第八三話「広貴、依妻訴、炎魔宮へ被召事」は、藤原広貴という者が、地獄に落ちた亡妻の訴えて死んで閻魔の庁に召されて展開される地蔵説話である。本説話の同文的同話とされる『日本霊異記』下巻第九話では、中心人物の名に異同があり、「藤原朝臣広足」とある<sup>⑧</sup>。小林保治氏、増古和子氏の「広足」は亡妻の死を悼んで、その後生善処を願い、来世では同じ浄土に生れることを願って、妻のために法華経書写の功德を積むなど、なかなかのよき夫ぶりを見せている。しかし、妻の訴えによる話の展開よりは共通している<sup>⑨</sup>という解釈は注目に値する。第八三話は、『日本霊異記』より、亡妻の嘆かわしさや訴えを説話の中心的な話題として認識しているのである。

第五九話「三川入道、遁世之間事」は「今昔」巻一九第二話と同文的同話と見做されている。しかし、説話の大きな枠組みが同じと言えども、第五九話と類似しているのは「今昔」巻一九第二話の前半であり、特に第五九話では、俗人だった頃の参河入道(大江定基)の「もとの妻をば去りつ」と、本妻を離縁して、若い美貌の女を新しく妻に迎えるが、『今昔』巻一九第二話では「本ヨリ棲ミケル妻ノ上ヘニ」若い女を愛した、と記されており、本妻がひどく

嫉妬したと描写されている。本妻との離縁に対しての異同や、『宇治拾遺』が嫉妬という表現を用いていないことなどから、第五九話と『今昔』巻一九第二話を同文話と認めるのは難しいと考える。

最後に、母の用例と、娘を意味する「女」の用例を確認する。

### 三、母・女(娘)

母の用例は、(1)第一九話、(2)第五一話、(3)第七七話、(4)第八五話、(5)第一〇八話、(6)第二一三話、(7)第一四二話、(8)第一六七話、(9)第一七八話、(10)第一九二話の計一〇話の説話に見える。

第五一話「一条摂政歌事」は母親と乳母が、十分な計算ずくで、正体の割れている上流貴族の若殿との関係を受け入れようと共謀して、妙に潔癖で好人物の父親を欺いた結婚をめぐる哀笑話と読まれている。

第一一三話「博打聾人事」は、長者の家の娘の母が、「顔よからん聾取らむと、母のもとめけるを伝へ聞きて、「天の下の顔よしといふ人、聾にならん」と言っているように、「母親の面食い趣味が呼び込んだ」所謂結婚詐欺譚である。

第五一話や第一一三話は子の婚姻に積極的に関与する母が描かれる。また、両話共に同文的同話が見当たらない孤立話であることも特徴的である。

「母」の用例は、「女」や「妻」語に比べると用例数は少ないが、説話の展開上重要な役割として登場する場合がある。例えば第八五話「留志長者事」の記事を見ると、『宇治拾遺』の編著者は、妻よりも、母に信頼を寄せていたようである。先学において「堅苦しい仏教説話にしないところ」<sup>⑫</sup>に特徴があると読まれてきた第八五話は、同文的同話とされる『今昔』巻第三二話では、留志長者の慳貪の業を改めさせるために留志長者に姿を変えた帝釈天と、本物の留志長者、どちらが本物か判断するために、「證判ノ者盧至ガ妻子、二向テ二人ノ寶否ヲ問フ」<sup>⑬</sup>とある。ところが『宇治拾遺』第八五話では「御門にうれへ申せば、「母に問へ」と仰せあれば」と、「母」に判断を委ねる。同じく『古本説話集』下巻第五六話の同話でも「母」になっており、『宇治拾遺』だけの問題ではないが、このような同話間の異同は、どういう意味をもつか。この問題について、廣田氏は「いうならば文献間の「同話」の存在は、内容に対する肯定を意味する。すなわち、説話集の編者が感銘と賛意をもって受容したことの結果である。(中略)説話集の編纂において、時代の相違や共有する知識の差など基盤の相違から、改めて説明を要するがゆえに異同の付加されることがありうる。とともに、ある意図をもって強調を加えたり、修正を施すことによって異同の生じることも考えられる」<sup>⑭</sup>と論じておられる。

要するに、同話間で表現に異同が生じたのは、編著者が改める必要性を感じた痕跡だと考えられる。廣田氏の論に則つて『今昔』巻三第二二話と『宇治拾遺』第八五話、『古本説話集』下巻第五六話を比較すると、母と子の関係に寄り添った描き方をしている『宇治拾遺』と『古本説話集』は、『今昔』とは異なる意識があつた。この意識の違いについては稿を改めて論じたい。

次に、御女も含む、「娘」・「女」の用例が見える説話は(1)第一四話、(2)第四一話、(3)第四七話、(4)第五〇話、(5)第一〇八話、(6)第一二話、(7)第一一三話、(8)第一一九話、(9)第一六七話、(10)第一八六話、(11)第一九四話の計一話である。第四七話「長門前司女、葬送時、帰本処事」、第一二二話「大安寺別当娘ニ嫁スル男夢見事」、第一六七話「或唐人、女ノ羊ニ生タル不知シテ殺事」は表題に「娘・女」の語彙が含まれており、特に第四七話、第一六七話は娘にまつわる怪異譚のような雰囲気を交えつつ語られる説話である。

以上のように、女、妻、母、娘の意味をもつ語彙の用例を調査した結果、『宇治拾遺』全体を通して多くの用例が様々な説話に見られ、重複する説話も多いことがわかる。また、主要人物から通りすがりの名もなき者まで、物語における比重の置き方も多彩である。次に、ここに挙げた説話の中から、いくつかの説話を取り上げ考察を行う。

## 第二章 様々な女性の描かれ方

### 一・待ち続ける娘

第八話「易ノ占シテ金取出事」は「大きやかなる家の、あばれたるが有りける」に住む「女一人」と「旅人」の会話が展開される。

旅人が宿を探していると、荒れ果てた大きな家があつたので、そこに一晚泊つた。夜明けになり、食事をして出て行こうとすると、この家の女が出てきて「私の金千両を貸している。返してほしい」と引き止めるのであつた。その女は、親が亡くなったときに、十年後に易の占いをする男が来て泊まることになるが、その男に金千両を貸してあるので、その金を返してもらうように言われたのだつた。そのため、女は今日という日を待つたのである。

本説話は時代・場所・人名などが具体的に示されず、冒頭の唐突さも含めて異色ある一編だと評価される。

「易の占の上手にて、此女のありさまを勘へけるに」親は、女に「世中にあるべき程の物など」を与え、「今なん十年ありて、その月にこゝに旅人来てやどらんとす」と予言して亡くなる。娘の運勢を占つてみるということから、親の子への関心、憂慮の念が垣間見える。また、親の未来予知を受けた女が苦しい生活を耐え続け、「易の占する男」、すなわち旅人を待ち受けた経緯が、決して長くない

説話の中で繰り返し説明される。このような繰り返しから、小林氏、増古氏の「易の占いの未来予知力の確かさを語るのが本話のねらいだが、運命の不思議を信じて待つことの大切さをも語っている」<sup>16</sup>と評価する。すなわち、『宇治拾遺』の編著者の興味は、人名や地名にはあまりなく、根気よく待てば、いずれ報われるということを証明する女にあると言えよう。

同じく第一〇八話「越前敦賀女観音助給事」にも、待てば甘露の日和ありと言えような女の物語が描かれる。

越前国は敦賀という所の夫婦に一人の「女」<sup>17</sup>がいた。父も母も亡くなり、零丁孤苦の女は「観音に向奉て、泣く／＼申あたる程に、「夢に「いみじういとをしければ、男合わせんと思ひて」と啓示を受ける。

本説話は『今昔』巻一六第七話と同文的同話とされているが、『宇治拾遺』は『今昔』には見当たらない、女に関する描写が詳細に記されている。具体的には、「蕙、畳をとらせばやと思へども、恥づかしと思てゐたるに」という記述により、女の宿を訪れた人々へ出すための蕙・畳の用意がないことを恥づかしく思う心境が記されており、女のところに観音の現身（下女）が現れると、女は「いとをしかりつる事を、思ひかけぬ人の来て、たのもしげにいひて往ぬるは」と、予期せず訪れた下女がいなければはみじめな状態で、

恥をさらしそうであつた心境を語る。同話の『今昔』巻一六第七話は、女の依存心が強く、従順な態度が第一〇八話ほど詳細には描かれていない<sup>17</sup>。『今昔』に比べ、本説話は観音の靈験・利生を語るだけでなく、生活困窮者の女が観音菩薩にひたすら懇願し、夢告げを信じて男を待つ姿、依存的でありながら思いやりのある姿などに興味をもつて描かれている。

第一〇八話の女は、親の予言通り旅人の訪れを待ち続ける第八話の女の姿と重なる。

## 二. 生女房とよしなき妻

第七六話には、若い僧が書きたいかげんな仮名暦を、風変わりな暦だと思ひながらも然るべき理由があるだろうと信じ、暦に従う「なま女房」の説話が載っている。この女房は、暦に書いてあるとおり、用を足すことを数日我慢し、説話の最後は「物もおぼえずしでありけるとか」と締め括られる。「なま女房」は諸注釈書の解釈から若い新参の女房であり、なま女房の「生」は世慣れぬ、未熟の意<sup>18</sup>と理解できる。末尾の「物もおぼえずしてありけるとか」は、失禁か失神か、様々な見解があるが、<sup>19</sup>いずれにせよ大変なことになったということである。

中島悦次氏は本説話を「所謂迷信に凝つた悲喜劇」<sup>20</sup>だと評価して

おられる。また、諸注釈書において本説話は「純真といえれば純真、愚かといえれば全く愚かな女房の、断食ならぬ断糞の行にふりまわされる悲劇。それにしても罪作りな坊主であり、また俗信の根強さがかがわれる」、「まじめに受け入れようとした敬虔なる若い女を揶揄すると同時に、その暦を書き与えた僧侶のでたらめぶりへの批判も込められている風刺譚」だと評価されて来た。しかし、この「なま女房」を全く愚かだと評価できるのだろうか。また、本説話は、この女房を揶揄しているのだろうか。

廣田氏は本説話に関する論考で「古代以来の生活規範に縛られて生きることに對する揶揄が込められている」と、先学と違う視点から、揶揄される対象は「古代以来の生活規範に縛られて生きる」と論じておられる。

すなわち、「宇治拾遺」は、何かに囚われること、そのような观念に對する皮肉を本説話で伝えたかったということである。「物もおぼえずしてありける」のは生半可な女房の問題ではない、むしろ女房に對する哀れみを感じる説話ではないだろうか。

生半可な解釈がもとで、失脚に至る場合もある。

第四話「伴大納言事」では、佐渡国郡司の従者をしていた伴善男という大納言が、夢に「西大寺と東大寺とをまたげて立たり」と見て、妻に語る。妻は「そのまたこそ、裂かれんずらめ」と、夢を

合わせる。後に郡司が「よしなき人に語りてけり。かならず、大位にはいたるとも、事いで来て、罪をかぶらんぞ」と言う。その後、善男は上京し大納言の地位に昇るが、応天門の放火事件によって失脚する。第四話で妻は「よしなき人」として登場するのである。

奈良の西大寺と東大寺を跨ぐ、内裏を抱いて立つとは、いうまでもなく、最高権力者になることを暗示していた。善男の夢は、天皇や宮庭を我が物とするという意味をもっていた。聡明な女性ではなかった妻は、善男が見た夢の象徴的な意味に気付かず、浅はかな夢合わせをした。

柳田國男氏によると、「かつて一家のうちで夢を語る役には主婦以上の適任者は無かった」らしく、佐々木孝二氏は「善男が妻に夢を語ったことは必ずしも軽率な行為とはいわれない」と述べておられる。善男が夢から覚め、第一に夢を語った相手が妻だったのはごく自然なことであつただろう。

本説話における「よしなき人」は、諸注釈書でつまらない人、具合の悪い人と訳されているが、筆者は、妻が高貴な吉夢や夢合わせとは「縁のない人」という意味ではないかと推測する。

第四話の「よしなき人」である妻や、第七六話の「なま女房」は、生半可な知識をもっているがゆえに、説話の面白さを成り立たせる。「宇治拾遺」だけでなく、多くの説話で妻は、中心人物のとなり

で話題の深刻さや重大さ、或いは面白さを強調させる引き立て役として登場する傾向がある。そのため、あまり尊敬されるような描写はされないのが実情であろう。

### 三、敬われる母と強かな老女

では、子を産み、育てて、一人前の母になると、説話でどのように描写されるのだろうか。

第十九話「清徳聖、奇特事」は、冒頭に伝未詳の遁世者の亡くなった母の追善・転生の孝養話が語られる。

清徳聖という聖が、亡くなった母を棺に入れ、愛宕山に運び、母のために声をとぎらせることもなく千手陀羅尼を唱えた。この棺のまわりをめくり続けて三年が経ち、母の声が聞こえ、仏になったと告げられる。母が成仏し、葬送して京へ向かう途中、疲れて食べ物がとても欲しかった聖は他人の畑の水葱を食べ、三町斗食べ続け、白米も一石完食する健啖ぶりを見せる。こうして、本説話は清徳聖の大食い話から、その原因を見抜く師輔の霊眼力の話へと展開し、錦小路の地名起源話として結ばれる。愛宕山は地藏菩薩と竜樹の久住の地であり、天狗の住みかとも伝えられる神秘の霊場と言われ、『源氏物語』東屋の巻に「愛宕の聖」の記事があるなど、ここで長年住み、行を積んだ高僧の事跡は諸書に見える。

勝浦令子氏は、女性が成仏するために男子に生まれ変わる必要があることについて「平安中期以降、經典にみえる仏教女性観を前提とし、女性は罪深く穢れた五障の身であると否定的にとらえ、「変成男子」しなければ成仏できないという教義に基づく女人往生論や女人成仏論が論じられるようになっていた」と述べる。

本説話の本文には、「此陀羅尼を、かく夜昼誦給へば、我ははやく男子となりて、天に生れにしかども、おなじくは仏になりて、告申さんとて、今までは告げ申さざりつるぞ。今は仏になりて、告申也」と、清徳聖の母の変成男子が成就し、人間界の上、六道の一つである天上界で修行を続け、仏界に往生を遂げたことを知らせる。清徳聖は母のためにその手助けをしたと言える。清徳聖は亡くなった母のために三年間飲まず、食わず、寝ることもせず、声をとぎらせることもなく千手陀羅尼を唱え母を弔い、母が成仏したことを確認してから、ようやく愛宕山から下りて来た。その反動による清徳聖の大食いは、亡母がきっかけとなる。説話の流れが大きく変わる重要な転機として、母の変成男子と成仏が設定されているのである。説話展開において、母がきっかけとなる説話は、畜生転生の夢告話、第一六七話「或唐人、女ノ羊ニ生タル不<sub>レ</sub>知シテ殺事」がある。第一六七話は、亡くなった娘が母の夢に現われ、「明日、まさに首白き羊になりて、殺されんとす。願はくは、我命を許し給へ」と、

生前の罪の報いを受けるために羊の身体に転生し、明日には殺されるといふ。しかし、国守である父は、妻が引き止めても聞かず、羊を調理させるといふ悲惨な結果となる。

勝浦氏によると、「中世には、妻が夫方親族と同居していく父系直系家族を基礎単位とする婚姻形態が多くなっていった。このような婚姻関係において、夫と妻の家族意識は、妻と未婚の子供の所に夫が通つてくるといふ結合を反映し、常に母と子の絆は強かった。しかし夫と妻が必ずしも強い家族意識をもつて結びついていかなかったと考えられる<sup>33</sup>」という。亡くなった娘が父ではなく母の夢に出てくるのは、このような中世時代の婚姻形態が結びついている。子の母に対する信頼性から、辛い状況から救済してほしいことを母に訴えたかったということが分かる。

本説話について、小林氏、増古氏は「羊の姿や鳴き声が、母親や客人たちには娘のもの見え、聞えたのに、父親にはそれが分からなかったという設定は類型的だが、母親への夢告にもかかわらず、父親の命令によって殺されてしまうという行き違いの悲劇的構成（中略）まったく誰もが事情を知らないままに進行した悲劇的結末ではなく、それを食い止められるきっかけが与えられていたにもかかわらず、そうはできなかつたという展開が、読者の心につつまでも悔しさを残す<sup>34</sup>」と詳細に解説している。重要なのは、悲劇的結末を食

い止められるきっかけは母だったことである。

このように子に信頼され、強い絆で結ばれていた女性は、年を取ると孤独な存在として描かれる。

老女が中心人物として登場する説話は第三〇話と、第四八話である。

第三〇話「唐卒都婆二血付事」の「年八十ばかりなる女」は、「此卒都婆に血のつかん折になん、此山は崩れて、深き海となるべき」という先祖の予言を信じ、険しく急で遠い道のりを雨が降り、雪が降り、風が吹き、雷が鳴り、凍りつく季節にも、また暑く苦しい夏にも一日も欠かさず頂上まで必ず登つて卒都婆を確認する。その原動力は、親に対する信頼にある。老女の親は一二〇歳で亡くなり、さらに祖父は一二〇歳くらい、またその父や祖父などは二〇〇歳くらいまで生きたという。何百年も前から言い継がれてきたことを、老女は父から聞き、信じて疑わない。

山で涼んでいた「男ども」は、そんな老女を「あやしがりて」、嘲笑い、卒都婆にわざと血を付け、予言通り、山が崩れ、深い海となり、老女とその家族以外は皆死ぬ。老女と若者とのやり取りから、生真面目で、愚鈍で、奇妙な印象が際立つが、最後に助かる老女に対し、『宇治拾遺』は冷笑する態度は見せない。

信じる老女と、信じない男どもは、対立的な構造を見せるが、そ

の一方、本説話は教訓的批評の形は取らない。『宇治拾遺』は、先祖を重んじ配慮する死者観念と、どんな悪天候、押搦にもめげず毎日卒都婆を確認する老女の精神力、信じる力を称える。

同じく老女が中心人物となる第四八話「雀報恩事」では、「六十ばかりの女」が、腰の骨が折れた雀を治療し、雀からもらった瓢の種から実が成ると、中から白米や金銀財宝が出てきて裕福になる。

これを見た「隣にありける女」は雀を数羽捕まえてわざと腰を折るが、雀がくれた瓢から蛇や蜂が出て、刺されて死んでしまった。

佐生久美子氏は、第四八話の中に垣間見える老女の生き方、また家族とは、老者とは何か、といったことに注目された論考で、第四八話の「一緒に住んでいるのもかかわらず、家族とのあたたかい繋がりのない孤独な老女」は律令体制という「弱者に厳しい社会体制」に基く存在であると論じられた。

さらに、廣田氏は「そのような媪と子や孫との関係は都市的な家族関係とみることができよう」という見解を述べておられる。

『宇治拾遺』の編者は、このような都市的な家族関係を描くことで、何を伝えたかったのか。第四八話について、小林智昭氏が「典型的な悪因悪果の応報譚」であると評価しておられるように、本説話は腰折雀や舌切雀などの昔話で広く知られるもので、因果応報を説く説話と読まれてきた。しかし、三木氏、浅見氏は校注に「一对

の主人公の幸不幸を語るが、二人の人柄には善悪といった対照性らしきものはなく、従って、昔話の舌切雀（または腰折雀）のような勧善懲惡譚の色彩は希薄である。むしろ、一見さりげなく素朴なよそおいの中、二人の老女の孤独と心情のゆれ、幸不幸というものの条理と不条理などを独特な人性批評にもとづいて描くものかと思われる」と解いておられる。さらに、小峯氏は「この話で注目すべきは、老婆と子、孫との関係であり、それを軸に事件が展開していくこと」だと強調しておられる。

本説話に登場する「六十ばかりの女」は、怪我をした雀を介抱するとき、子供や孫に「あはれ、なんでふ雀飼はるる」と、なんてまた雀なんか飼われるのか。飼っても何の役にも立たない、むだなものを、という皮肉を言われ、雀が飛んで行き、やることがなさそうに見えると家族に笑われる。

隣に住む老女は、隣家が裕福になったのを見た子供に「おなじ事なれど、人はかくこそあれ。はかぐしき事も、えしいで給はぬ」と皮肉を言われる。小林智昭氏は、この子供の言葉に「子や孫に笑われながらもすずめを飼った老女にしろ、この隣の女にしろ、老人の置かれた位置がよくあらわされている」と指摘しておられる。隣の老女が雀を何羽も捕まえては「一が徳をだにこそみれ（中略）あの隣の女にはまさりて、子どもにもほめられん」という言葉から、諸注

積書により「失敗はできない面子（メンツ）があつた」<sup>45</sup>老女の立場や、「あの隣の女以上に、子供たちにほめられるだろう。この女の行動の動機を示す部分の」<sup>46</sup>であること、「第一段階（雀を捕まえて腰の骨を折る）がうまくいったことから老女は自信を強め、強欲になる」<sup>47</sup>などが見受けられると理解できる。

また、雀が落として行つた瓢の種から、あまり大きくない実が七つ、八つなると、老女が「はかぐしき事、しいです」といひしかど、我はこの隣の女にまさりなん」と、隣の老女と比較しながら、偉いでしょうと、笑顔になつて子供に言うと、家族は「げにさもあらなん」と、まだ確信を持ってないが、ぜひそうあつてほしいと思うだけで、冴えない言葉が返ってくる。子供はさらに「となりの女房は、里隣の人にもくはせ、われもくひなどこそせしか。これはまして三が種なり。われも、人にも、くはせらるべきなり」と、自分も食い、他人にも食わせられたらいいと言われ、老女はすぐ納得する。

第四八話に登場する二人の老女の言動について、佐生氏が「深読みかもしれない」と述べながら、「年老いて家族のだからも必要とされなくなった身であることを認めつつも（中略）我が子のために何とか役に立ちたい、という母の心が少なからずあつたのではないか」と解釈しておられように、先に雀の報恩を受けた隣家の老女を見て、雀を虐待し、無理矢理報恩を受けようとした老女の行動に

は、動物に対する愛情は欠いているが、家族に認められたいという承認欲求や、たらふく食べさせたいという母性が垣間見える。家族に冷遇されてもめげない強い心や、聞いた通りにすれば願っていたことが叶うと信じてやまない老女は、第三〇話の老女と相通じるものがある。第三〇話においても、毎日山に登り卒都婆を確認するのは老女一人だつた。卒都婆に血がついているのを確認したのも、里の人々にすぐ逃げるよう触れ回つたのも、子や孫を引き連れて避難したのも老女だつた。老女はただ自分の身だけのために言い伝えを重んじたのではない。

第四八話は、類話の昔話や伝承が「隣の爺」型の話として分類されるため、本説話も対立的構造として読まれることが多い。しかし、隣人との関係性より、二人の老女の家族間の関係性と、老女の精神的な強かさを描くところに特徴があるとも読めるのではないだろうか。

まとめにかえて

以上、『宇治拾遺』の中に描かれた女性を巡って、説話の諸様相を検討した。まず、先学の研究を踏まえ、『宇治拾遺』の女性が登場する説話を検討するため、女性に関係する意味をもつ用例の調査を行った。その結果、やはり「女」の用例が見える説話が多いこと

が分かるが、同じ「女」という用例であっても、彼女たちには勿論共通点もありながら、ただの「女」に一括りにはできないくらい多彩で、個性的な事例を見ることが出来た。

次に、女性が登場する説話の中から、いくつかの説話を取り上げ各説話における様々な女性の描かれ方を検討した。説話の展開において転機となる、主要な脇役として登場する第四話の妻の頼りなさや、第七六話、第一〇八話などに見える、夢や迷信を信じ、目に見えない未来のために、ありのまま従うという姿勢や、第三〇話、第四八話の老女の人生に対して、『宇治拾遺』は責めたり、冷笑したり、蔑んだりしない。特に、訪れる人を待ち続ける娘や、目の前の規範に従う生女房、毎日卒都婆を確認する老女は、いずれも信じる気持ちによるもので、その気持ちは宗教的な信仰とは異なる。『宇治拾遺』の編著者は、そのような女性の純粋さを理解していたのではないだろうか。

今回取り上げた説話の中には、同文的同話・類話の存在が指摘されるものが多数あったが、紙面の都合上、詳細な考察ができなかったので、稿を改めて論じたい。

## 注

① 三木澄人氏は「無名人への眼——「女二人」の物語」(『国文学解釈

と教材の研究」第二九巻第九号、学灯社、一九八四年)で『宇治拾遺物語』固有の話に無名人を主人公とするものが目立ち、彼らの映像は、人間一般、というよりわれわれ自身の姿をやどしつづつ、後々まで長く消えない印象を残す」とされ、第四七話、四八話を取り上げ『宇治拾遺物語』の特徴的な一面の確認を試みた。

② 三木紀人・浅見和彦校注『新日本古典文学大系 宇治拾遺物語』岩波書店、一九九〇年。

③ 『宇治拾遺物語』の女性が登場する説話に関しての先行研究に平城隆雄氏(『説話文学のおもしろさ——『宇治拾遺物語』に登場する女性達』九州大谷情報文化』第三〇巻、二〇〇四年)、畠山千春氏(『宇治拾遺物語』中の貧女の説話』『二松』第三〇巻、二松學舎大学大学院文学研究科、二〇一六年)、出口佳奈氏(『説話文学における女性』尾道大学日本文学論叢』第二号、尾道大学日本文学会、二〇〇六年)などの論考がある。

④ 調査にあたって『宇治拾遺物語総索引』(増田繁夫・長野照子編集、清文堂出版、一九七五年)を参考した。

⑤ 出口佳奈「説話文学における女性」『尾道大学日本文学論叢』第二号、尾道大学日本文学会、二〇〇六年、七九頁。

⑥ 佐藤謙三編『鑑賞日本古典文学 宇治拾遺物語』角川書店、一九七六年、二八二―二八三頁。

⑦ 拙稿『宇治拾遺物語』第五七話「石橋下蛇事」考・造られた孤立説話』『文化学年報』第六五輯、同志社大学文化学会、二〇一六年。

⑧ 中田祝夫校注『新編日本古典文学全集 日本霊異記』小学館、一九九五年、二〇〇―二〇一頁。

⑨ 小林保治・増古和子校注『新編日本古典文学全集 宇治拾遺物語』小学館、一九九六年、二〇〇―二〇一頁。

- ⑩ 前掲(注⑨)、一四三頁。
- ⑪ 前掲(注⑨)、三〇二頁。
- ⑫ 前掲(注②)、一五八頁。
- ⑬ 黒板勝美編『國史大系 第一六卷 今昔物語集』(天竺・震旦) 吉川弘文館、一九九八年、一五〇頁。
- ⑭ 廣田收『宇治拾遺物語』の表現、同志社大学学位論文、一三―一四頁。
- ⑮ 前掲(注②)、二〇頁。
- ⑯ 前掲(注⑨)、四一頁。
- ⑰ 拙稿「宇治拾遺物語」巻9第3話考——『今昔物語集』『古本説話集』との比較分析を中心に——『日本文化研究』第六三輯、東アジア日本学会、二〇一七年、三二四―三二六頁。
- ⑱ 大島建彦校注『新潮日本古典集成 宇治拾遺物語』新潮社、一九九五年、三〇頁。
- ⑲ 廣田氏はこの解釈をめぐる見解の相違について、「そもそも『宇治拾遺物語』は説話と呼ぶには、平安期の伝統的な物語の語法や表現を引き継いでいる」とされ、粗相を表すというのは「いささか品位にかけている」と指摘しておられる(『宇治拾遺物語』第七六話「仮名曆詠タル事」考)『同志社国文学』第六一号、同志社大学国文学会、二〇〇四年、一四六頁。
- ⑳ 中島悦次『宇治拾遺物語全註解』有精堂出版、一九七〇年、二三七頁。
- ㉑ 小林智昭校注『日本古典文学全集 宇治拾遺物語』小学館、一九七三年、二〇七頁。
- ㉒ 前掲(注⑨)、一八二―一八三頁。
- ㉓ 廣田收「宇治拾遺物語」第七六話「仮名曆詠タル事」考『同志社国文学』第六一号、同志社大学国文学会、二〇〇四年、一五一頁。
- 『宇治拾遺物語』における女性の描かれ方
- ⑳ 樋口清之「日本人の眠りと夢」『日本人の歴史 夢と日本人』第一〇巻、講談社、一九八二年、四三頁。
- ㉑ 柳田國男「夢と文芸」『柳田國男全集』第九巻、筑摩書房、一九九八年、一三二頁。
- ㉒ 佐々木孝二「中世説話の構造における夢の役割と東北における展開」『文経論叢』第二五巻三号、弘前大学、一九九〇年、九一頁。
- ⑳ 前掲(注⑱)、三〇頁。
- ㉑ 前掲(注⑨)、三三頁。
- ㉒ 前掲(注⑨)、六七頁。
- ㉓ 阿部秋生他校注『新編日本古典文学全集 源氏物語』第六巻、小学館、一九九八年、八六頁。
- ㉔ 勝浦令子『古代・中世の女性と仏教(日本史リブレット)』山川出版社、二〇〇三年、五二頁。
- ㉕ 前掲(注②)、四〇頁。
- ㉖ 前掲(注③)、四四頁。
- ㉗ 前掲(注⑨)、四一一頁。
- ㉘ 老女と男どもの会話から垣間見える特徴、同話の『今昔』巻一〇第三六話との相違については、拙稿「宇治拾遺物語」第三〇話「唐卒都婆二血付事」再考・比較から本説話の独自性を考える(『文化学年報』第六四輯、同志社大学文化学会、二〇一五年)で論じている。
- ㉙ 前掲(注⑤)、二七四頁。
- ㉚ 佐生久美子『宇治拾遺物語』に見る庶民の姿——巻三ノ十六雀報恩事より「老い」を生きたとは……』『二松学舎大学人文論叢』第五九号、二松学舎大学人文学会、一九九七年、五二頁。
- ㉛ 前掲(注③)、五八頁。
- ㉜ 前掲(注⑭)、一一二頁。

- ④⑩ 前掲(注⑫)、一六四頁。
- ④⑪ 前掲(注⑫)、一〇二頁。
- ④⑫ 小峯和明『宇治拾遺物語の表現時空』まんぼう社、一九九九年、二二七頁。
- ④⑬ 前掲(注⑨)、一三二頁。
- ④⑭ 前掲(注⑫)、一四三頁。
- ④⑮ 前掲(注⑨)、一三五頁。
- ④⑯ 前掲(注②)、一〇〇頁。
- ④⑰ 前掲(注⑨)、一三五頁。
- ④⑱ 前掲(注⑨)、一四五頁。
- ④⑲ 前掲(注⑳)、六三頁。